



YAMAGA

近代の山鹿の
偉人たち
シリーズ

016

「米野岳魂」に生きた初代村長と道路建設（一八五六〜一九二〇）

竹原 柰次

たけ はら もく じ



明治二十二年（一八八九）町村制が施行されて初代の米野岳村の村長に選ばれ、二十二年間その職にありました。

コレラが流行した時には率先して防疫に努め、自らも感染する危機にさらされる中で村民の命を守る為に働きました。

当時は山鹿や木葉へ行くにも山裾の細い道があるだけで不便でした。村の発展の為に、自ら借財し、縦貫道路を完成させました。

米野岳高等小学校の設立に奔走し、生徒達は「米野岳魂」を心に抱いて人生に旅立って行きました。

内田村の村長となり、六年間道路行政に尽くしました。



義父 隈部亀七 妻 よろず 三男 国雄
(山鹿広町北島三光堂写真場)

生い立ち

竹原空次は米野岳山のふもとの米野村、現在の鹿央町合里に、安政三年（一八五六）十月四日、軍次・ウタの長男として生まれました。祖父の彦四郎が「郡代直触」（細川家に献金をする事で、庄屋 惣庄屋を介さずに細川藩直属の郡代の命を受ける士族の身分）となっていたところから考えると、軍次の代も村の世話役であったらうと思われる。自宅近くの山王社に猿田毘古大神を祀り、自然石の大手水鉢を寄進しています。読書家だったらしく『本朝鍛冶考』（日本刀の刀匠についての本）などが残っています。

空次の幼いころは、米野村には細川藩士の戸田熊太郎が私塾を開いていたことが知られていますが、その長男の寅彦という方に勉強を見てもらっていたそうです。下千田で私塾を開いていた隈部亀七（後に義父となる）のもとで『論語』等を学びました。また武術にも励み、十五歳の頃には近くの竹原可太郎という方に伴なわれて熊本の槍術指南松原甚左衛門の所まで歩いて通った時期もあったそうです。明治七年（一八七四）十八歳の時役場の職員となり、翌年米野村の用掛となりました。用掛というのは県に認められた村の世話役と考えてよいでしょう。

明治十三年（一八八〇）二十四歳で、千田村の隈部亀七（元亀助）の長女よろずと結婚。隈部家は菊池家の家老隈部家の子孫で代々下千田で庄屋をしており、亀七も「上席郡代直触」の身分を得ていました。亀七は庄屋として下米野に住んでいたこともありましたが、後に下千田で私塾を開きました。明治五年（一八七二）千田小学校開設の時から九年間その教師を務めています。（『創立百周年記念誌』）後では岩倉の分教室でも教えています。よろずも父亀七の教えを受けて育つたに違いありません。夫空次の多忙な日々を影で支えた女性でした。三男の国雄は「美しく 優しく 賢く 強い母だった」と記しています。

村長就任前の職歴

空次が米野村の用掛であった明治十年（一八七七）二月、西

郷隆盛は薩摩士族を率いて明治新政府打倒の戦いを始めました。西南戦争です。熊本城に立てこもる政府軍と西郷軍との激しい戦いは田原坂の戦いが知れ渡っていますが、山鹿を中心に、郷原広を通る豊前街道沿いの村々、岩原 米野 姫井 霜野と続く木葉への道沿いの村里も戦いに巻き込まれた激戦地でした。住民は自衛の組織を作り、警護に当たりました。用掛りであった李次も村内を巡回したことが記録に残っています。

その後、高瀬警察署、山鹿山本菊池合志郡役所、合里岩原連合会議員、十三ヶ村連合会議員、小学校校務員建築委員等多くの職務を経験しています。この時の経験が後に生かされて村の方々の意見を聞き、それを束ねて村の政策に生かしていく行政を可能にしたのだと思われます。

米野岳村村長

明治二十二年（一八八九）に町村制が施行されると、岩原村と合里村は合併して「村民の申し出」によって、村にある高山の名称をとって米野岳村となりました。

李次は町村制が施行されるとその四月二十一日に村会議員に当選し、二十五日に村長に当選しています。三十三歳になっていました。それから二十二年間、稲田村の村長六ヶ月を間に挟んで、その任を全うする為全力で走り続けることとなります。

コレラの流行とその防疫

李次が村長になったその翌年、明治二十三年（一八九〇）コレラが流行しました。日本全国に広がり、六万人近くが死亡する程

の猛威をふるいました。熊本県にも波及し二十三年には一三〇六名が感染し、八〇五名が死亡しました。

二十四年（一八九一）に米野岳村で流行した時には、消毒等他の人に任せず自ら率先して尽力しました。九月に寺米野で死者が出た際にも、家族もためらう死体の取り片づけを村長自らの手で行いました。そのために感染し危篤状態にもなったのですが、治療の結果快癒したのでした。村会は臨時に会を開き、村長に金七円を贈りましたが、更に有志の者が義援金を募り三十円（村長の月給十二円五〇銭）を贈りました。李次村長の献身的な行爲が人々の心を打ったのです。県からも篤志者として表彰されています。

姫井地区に赤痢が流行した際にも消毒等に自ら奔走し、力を尽くして防疫に努めたのでした。

山鹿木葉縦貫道の建設

明治の三十年代頃までは、米野岳村から南の木葉、北の山鹿へ通じる道は米野岳山の山裾を縫うように通る曲がりくねった細い道しかありませんでした。明治二十四年（一八九一）に九州鉄道が博多から熊本（春日駅）まで、二十九年には八代まで開通してました。山内村を通る佐世保往還道路も完成し、政府の殖産興業（産業を盛んにする）政策に対応して米野岳村も養蚕等の産業の振興に力を入れていかなければならぬ時代に直面してました。そのためには、山鹿木葉縦貫道の建設は村の発展にとって必要不可欠からざる施策だと村長は考えたのでした。その後の情況につ



米野の記念碑

いて『管内実態調査書』（警察署からの報告書）には次のように記してあります。

「最初周到な計画の下に事業に着手したが村内の国権党改進黨との軋轢があり、多くの美田良地を捨てると言って道路建設を村会において否決し米野の区民は村長一家を村八分にした。この間村長は敢然として道路完成の初志を曲げず、自己の全財産を担保として金を借り遂に道路は完成した。」

竹原村長の三男国雄は、「道で行きかう人がすれちがいに、父が道路建設のために全私財を投じたことをあげた。子供の楽しみのごんども、私と弟は舞足（駄の原長者伝説にも出る地名）の川堤から眺めるよりほかなかった」と回想しています。

明治三十四年（一九〇一）頃から着手し四十年（一九〇七）を越えたころ完成したと思われます。多忙であった明治三十六年の村長個人の日誌には、酒井新蔵と井澤末彦の名がたびたび出てい

ますが、この二人の財政的支援があったからこそ難工事も完成に漕ぎつけることができたのでした。村会も区民の理解も徐々に得られ、村人の労力奉仕も大きな力となりました。

大正十五年（一九二六）「竹原空次君之碑」（書は国権党出身の代議士平山岩彦）が、心血を注いで成った道路に面して建てられました。空次村長と村人とを結ぶ、村人の浄財によって建てられた美しい心の記念碑でした。碑を囲む石の垣に刻まれた一人一人の氏名は、村長を親しく囲んでいるかのようにその心情を今に伝えていきます。その年は空次の長男明雄が米野岳村の助役（後に村長）に就任した年でもありました。三男国雄は母よるずの墓碑銘に「頌徳碑を仰ぐ母の笑顔にはいつも涙が光っていた」と刻んでいます。夫を影で支えながら共に歩いた苦難の道を「笑顔」で回想する姿には、明治の、強くそして優しい女性の生き方が映っています。

郷原坂の改修

米野岳中学校の上の坂を郷原坂と言います。駄の原長者伝説でも語られている急な坂で、昔は伝説に因んで浦山坂と呼んでいました。険しく、地区の人々は日々の生活に不便を感じていました。しかし、住民の力だけではどうすることもできません。

竹原村長は、山鹿町外十七ヶ村土木組合の援助を取り付け、村会も予算を承認し、改修することができたのでした。明治三十二年（一八九九）のことでした。その坂は現在新坂と呼ばれています。

稲田村村長

郷原坂の改修を同年の五月に終えると、八月に稲田村の村長として就任しています。それは、国権党と政友会との政争のために村政が不能に陥っていたのを、両者を和解させて通常の状態に村政を戻すために乞われてのことであったと思われれます。翌年の二月には無事にその任を果たし、四月から米野岳村村長として復帰し、村政のかじを再び取っています。

米野岳高等小学校の開設

竹原李次村長が書き遺した明治三十六年（一九〇三）の日記には、縦貫道の改修のための現地視察、会合等について記してあるものが多く、多忙な日々明け暮れる記事で埋められています。その中に、高等小学校開設に向けて奔走する記事が見られます。二月二十三日 高等小学校校舎借受の件 郷原久保意春宅に出張 月額十円の借家料。五月二十日 高等小学校敷地代その他 二十八円四十二銭三厘 原安門へ遣す。七月二十九日 高小職員を訪問。十月十日の開校施行準備から十九日の開校式まで連日関連の記事、更にその後の整理と続いています。

来民にあった城北学館を併合して明治二十九年（一八九六）に中学済済の山鹿（城北）分校が設立されると、そこに入学するために高等小学校への入学希望者が急増しました。山鹿高小、来民高小、広見高小に続いての開校でした。仮校舎から出発して大正三年（一九一四）に廃校となるまでの十年間に、一千名余の生徒が巣立っていきました。現在の米野岳中学校はその跡地に建てら

れています。

米野岳中学校の校門近くに高小の同窓生による碑が建てられています。その一文に「児童力一度此ノ学校ニ来ルヤ一種独特ノ校風ニ感化セラレ其ノ所謂米野岳魂ナル一種ノ力ヲ獲得」したとあり、その「米野岳魂」とは「我は当に我が為すべきことを行ふ我は総てのものに勝つ」としています。中学校はこの「米野岳魂」を校訓（「勝つ」「克つ」）としています。

「奮励努力知識ヲ磨キタル校舎」が、その十年ノ歴史を閉じようとする時、同窓生達は「ソノ尊貴ナル校風ノ死滅ヲ惜シニコノ碑ノ下神聖ナル校旗ヲ埋メテ米野岳ヲ永久ニ伝ヘントス」と記しています。更に、この地を訪れる人は、しばし足を止めて「米野岳魂」を想い「汝ノ精神ヲ照ラセ」と結んでいます。

この深い愛校の精神を育んだその同じ地に米野岳中学校は建っています。現在、生徒達は校訓を心に刻み、為すべきことは何か思索し実行し、己に克つ強い精神力を日々培っているに違いありません。高等小学校の「尊貴ナル校風」は「死滅」することなく、同窓生達が願っていたように、脈々と現在に受け継がれているのです。校旗がどのようなものであったか知ることはできませんが、今、中学校の校旗が翻る青空の彼方に、「神聖ナル校旗」も力強くはためているに違いありません。

竹原村長の村政に取り組む姿勢も、まさにこの「米野岳魂」そのものであったと思われれます。流行病の防疫に自らの命をも顧みずに取り組んだのも、縦貫道を完成させたのも、「我が為すべきこと」を自覚し、「総てのものに勝つ」「不転の強い精神をもつて事に当たったからに違いありません。このような竹原村長の政



明治四十五年 合里尋常小学校 第18回卒業生 (4年制)

星上山の下、古宮にあった。現在町営住宅。小学4年を終了後 高等学校へ進む。(二列目中央が竹原空次)

治家としての履歴を辿ってきますと、政治を為すにあたって総てに優先するものは、人を愛する教育者でなければならぬということが、その底に流れているような気がします。

高等小学校の生徒と学校の設立を企画した村長との間には直接の関係は何もありません。この両者を結びつけたのは、「米野岳」という父なる山の風土に抱かれた中に育まれた、「米野岳魂」という共通の精神だったのではないでしょうか。

内田村村長

明治四十五年(一九一三)三月に米野岳村長を退職すると年号が大正と変わった同年の十月には内田村(現、山鹿市菊鹿町)の村長に就任しています。

当時、隣の岳間村(現、山鹿市鹿北町)には、岩野村に通じる岳間往還が明治四十二年(一九〇九)にすでに開通しており、その翌年には内田村と関係の深かった椎持区まで延長され、それは椎持往還と呼ばれていました。椎持区と関係が深かった内田村にとっては、そこに至る道路の改修は必要な事でした。竹原村長が内田村に招かれたのもその為だったのです。険しい峠を通る路の改修は困難を極めたと思われませんが、大正七年(一九一八)病気で退職するまでその任に当たり、翌八年に道路は完成しました。

大正九年(一九二〇)三月十二日に米野岳村で死去しました。六十五歳でした。



空次・よろず夫妻の墓

ちょっとコラム

●米野岳山

○米野岳山の山頂には城跡が残っていて、『肥後国誌』には豊後の佐伯氏が城主であったと伝えています。その子孫が姫井在住の佐伯氏で、その家系は井出迪裕氏の『米野のおもかげ』に記されています。

また、工藤掃部頭が城主であったと記す『先祖附（細川家家臣の系譜）』によると、天正の頃（1500年代）薩摩の軍勢と戦って討死した掃部頭の六歳の子は広村の庄屋宅で成人し、その子孫が阿蘇永草村の河瀬家に入り、代々庄屋を務めたと記されています。その系図を伝える河瀬家は熊本市花園町在住。

○松垣姫伝説を伝える蓮台寺に、肥後三十三霊場を詠んだ和歌があり、その中に次のような歌が記されています。

二十七番 米野山 はるばるとながれの末をたのむ
身に大悲のちかひふかき山川

「米野山」とは「米野山能満寺」のことです。



米野岳山

年表 History

おわりに

空次村長が書き遺した明治三十六年の日誌の中には、多忙な職務以外に、人と話すことが好きな、よく皆と酒（一升三十銭）を酌み交わす「村長さん」の風貌が描かれています。豆腐（二丁二銭五厘）を着に、時には牛肉（一斤二十一銭）、馬肉を買って、役場の二階や下米野の神社で会合を開き談笑する村長の周りには、同じような笑顔で応える村人の姿が重なっているのです。飲み過ぎた時などでしょうか、福田病院に行つて薬を調べてもらつてもいるようです。

墓は米野区の東の外れ、村の入り口にもなりますが、外輪崎の丘にあります。そこは、米野岳山の山裾で、その裾を縫うように北は下米野を通つて山鹿に、南は舞足を通つて姫井、そして山内村の梅木谷へと通じる古道が、遠い昔を思い出させるかのように続いています。東の彼方には記念碑が見え、その前を縦貫道が通つています。

杉と竹の林に囲まれ、笹の葉が吹く風にさやさやとかすかな音を立てる、ふるさとの優しい香りに包まれて、空次・よるずの夫妻は、永久の眠りについています。

安政三年 (一八五六)	▼	現・鹿央町合里に竹原軍次・ウタの長男として生まれる	明治三六年 (一九〇三)	▼	米野岳高等小学校の設立
明治七年 (一八七四)	▼	米野村用掛補となる 翌年用掛	明治四〇年 (一九〇七)	▼	この頃山鹿木葉縦貫道改修工事竣工か
明治一三年 (一八八〇)	▼	下千田村隈部亀七の長女よろずと結婚	明治四五年 (一九一二)	▼	米野岳村村長を退職する
明治一四年 (一八八一)	▼	合里村村会議員となる	大正元年 (一九一二)	▼	内田村村長となる 道路建設に従事す
明治二二年 (一八八九)	▼	米野岳村村長となる	大正七年 (一九一八)	▼	内田村村長を退職
明治二四年 (一八九一)	▼	コレラ防疫の功により県の表彰を受ける	大正八年 (一九一九)	▼	内田・岳間間の道路竣工
明治三二年 (一八九九)	▼	米野岳村村長を退き、稲田村村長となる	大正九年 (一九二〇)	▼	三月一二日死去 享年六五歳
明治三三年 (一九〇〇)	▼	米野岳村村長に復帰	大正一二年 (一九二三)	▼	米野岳村合里に「竹原空次君之碑」建立
明治三四年 (一九〇一)	▼	この頃山鹿木葉縦貫道改修工事竣工か			

近代の山鹿の偉人たち 016

「米野岳」に生きた初代村長～道路建設 竹原 空次

平成 23 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会 教育部 文化課

〒861-0501 熊本県山鹿市山鹿 1026-2

TEL 0968-43-1691

執筆者

竹原崇雄(熊本県立大学名誉教授)

参考文献・ご協力頂いた方 (敬称略)

鹿央町史上下(1989～1990) 菊鹿町史本篇(1996) 鹿北町史(1974)

歴史サロン花畑(熊本市役所内)

松本寿三郎(熊本大学名誉教授)

東 正治(元鹿央町教育長)

飯田 菘(山鹿市文化財協力委員)